



天才仏師の傑作、集結！ 史上最大の「運慶展」

と題した展覧会が上野で開かれました。期待して見に行きました。若い頃、奈良、京都を回ったことがありましたが、仏像は参拝されるべき存在という知識も、意識も、常識(?)もありませんでした。ただ、東大寺南大門の金剛力士像が印象深かったです。巨大で筋肉隆々たる力強い阿吽の形相が目には焼き付きましたが、作者も知らず、なぜこのように恐ろしい姿の仁王様がお寺の入り口にはあるのかしらと思ったものでした。

あの作者は運慶(?-1223)という仏師だったと初めて知りました。各地のお寺から、運慶の系譜を軸に、平安時代、鎌倉時代から 800 年の歳月を経た、国宝、重文の仏像が集結していました。会場内のライトアップされた仏像を見ていくうちに、仏像が発するオーラ、それは仏師の精魂込めた技による力強さでしょう、それに圧倒され、うめき声を漏らすほど、驚きました。微笑みを感じさせる端正な如来、役割を静かに象徴する菩薩、力の限りに働く姿の天王など、その前に立てば、仏が招いている、助けているという思いになるでしょう。それだからこそ、仏教徒は参拝するのでしょうか。

聖(しょう)観音菩薩立像は彩色が復元されていて、艶やかでした。様々な仏像の衣装の襷に細かい美しい文様が描かれた痕が残っていますので、出来立ての像はどれだけ美しく絵付けされていたのだろうかと思いました。特に仏さま然としていない兄弟学僧の無著(むぢやく)菩薩、世親(せしん)菩薩の立像は、厳しい修業を経て、老いてなお一筋に求める意志を感じさせ、その清々しさに打たれました。面白かったのは、6 体の童子立像で、熱気と意気を感じさせる若者像です。ポーズはどれも同じ感じですが、写実的で、個性あふれる人間性を感じさせる木彫の像です。

運慶は、現世での御利益が投影されるような仏像ではなく、信仰心が表現され、美術品と言える仏像を彫りだしたことは素晴らしいと思います。運慶の力強い表現は、俗世の人間の苦しみを抜け出し、何物にも侵されない永遠の、涅槃の幸いを願ったものではないか、と感じました。ミケランジェロの大理石の像にも負けない精神性を感じました。中世ヨーロッパの教会でも多くの像を持ち、非常に似ている精神性で、つまり、神の加護を求めるといふ一心が描かれていると思いますが、日本の仏像も遜色なく、高い精神性を表現していると思わずにいられませんでした。

私の父方の祖母は受洗前、浄土真宗で南無阿弥陀仏、母方の祖母は曹洞宗で南無釈迦と唱えていたような記憶がありますが、普通には仏様と言っていました。ところが、ご先祖様のことも仏様と呼んでいましたから、仏とは何が何やら分かりませんでした。今回「運慶展」を見て、大日如来、阿弥陀如来が人間を超越した最も崇高なる存在ですが、それ以外の菩薩などは修道中の身、仁王などは邪鬼を払う力持ち、毘沙門天などは助っ人として働く仏、ということで、すべて悟りを求めて修業する人間の姿で、それを仏と敬い、向かい合うのが仏教なのかと、知り得たような気がしました。それゆえ、ご先祖様も涅槃を求める仏として、大切にするのが、日本人なのでしょう。

「運慶展」は非常に人気がありました。長蛇の列をなして、入場を待っていました。800 年の時空を超えて、語りかけるものがあると思いました。国宝として誇れるものでしょう。